➡いよいよ8月31日「白旗山都市環境林」を語る会開催。13時30分　札幌市資料館2階

白旗山都市環境林ニュース

2024年8月２３日(金)　NO.４　発行:札幌の自然を守る会代表梶田清尚　HP:https://midori.kei1.org

森林皆伐、後世に悔いを残す

白旗山皆伐2

「白旗山」皆伐･再造林は本当にカーボンニュートラルになるのか

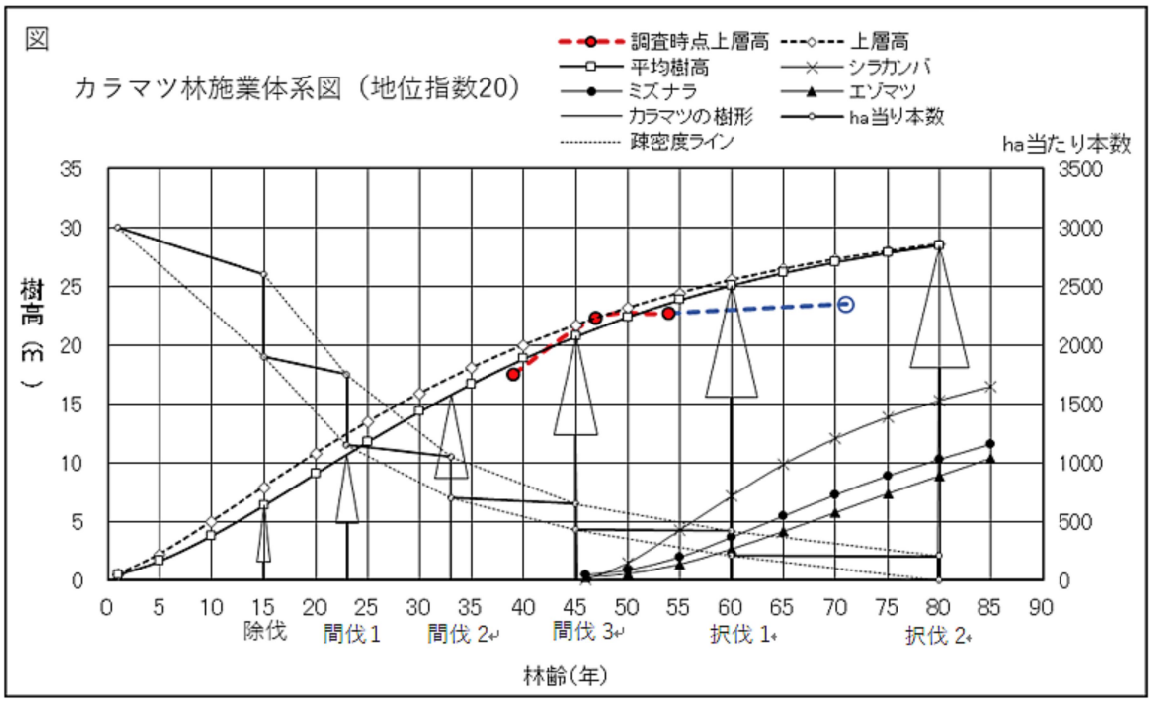
～森林におけるCO2吸収源対策の危うい実態～

【前号「白旗山皆伐1」からの続き】

皆伐止め樹下植栽と広葉樹で混合林を

樹木の種類・樹齢・生育状態などがほぼ一様で、隣接する森林とは明らかに区別がつく、ひとまとまりの森林のことを林分といいます。その林分の調査結果を「白旗山都市環境林」独自の施業体系に当てはめると、下図にもありますように林地の生産力をあらわす地位指数20の曲線の近くに位置しています。これは40年時における優勢木の平均樹高(20m)で示し、中位いわゆるⅡ等地となります。造林木(カラマツ)の立木本数500本/ha程度、広葉樹も300本/haとなり、ほぼ適合しており、この時点では順調に間伐を終えている林分といえます。

したがってあとは最終的な間伐を行うか、適宜、単木択伐や場合によっては群状択伐を実施し、既存の広葉樹はもちろん、あなが空いたような孔状地に侵入してくる種子から発芽した幼植物などの稚樹やエゾマツ・トドマツなどを植栽して混交林に誘導すればよい林分になります。ただし、以後「白旗山都市環境林」の2023年までの15年間の施業実績は不明です。



②森林皆伐対象の林分のCO2はどうなるのか

(1)基礎となる林況データと分析範囲･領域

ここでの分析の前提は、2023年における林況になります。林齢71年、林地の生産力をあらわす地位指数20に相当する本数・材積で択伐未実施の数値、

同じく推定される広葉樹の本数・材積数量、樹下植の未実施などの確定になります。ただし、高齢林のデータがないので過去3度の標準地調査及び道林試の最新の調査からの推定になります。樹高は体系図より下回っています。

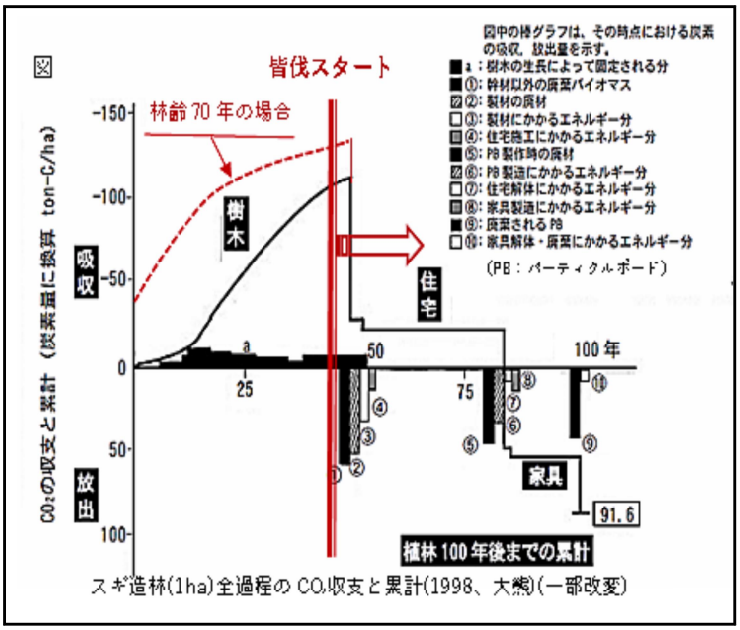
したがって、1面の図にあるとおり、2023年においては、カラマツは平均胸高直径30ｃｍ、樹高23.5mでha当たり本数500本、材積370m^{3}となり、広葉樹は500本に増え、平均胸高直径12cm、樹高8m程度と予想され、材積は22m^{3}と推定されます。

森林が70年かけ蓄えたCO2消失

次に、森林とりわけ人工林がらみの植物種を中心とした植生の遷移(森林施業)サイクルにおけるＣＯ2の吸収、貯蔵、排出量算定では、どの時点を始期とするのかが問題となります。多くのモデルは植栽時を始期とし、それ以降の育林、伐採、新植、伐採木の利用とその廃棄までを1サイクルとしてＣＯ2の収支を算定することになっています。

しかし、「白旗山都市環境林」のこれまでの森づくりを前提にした場合、今回の札幌市が進めている皆伐・再造林は、こうした裸地からの新植でのスタートとしてよいのか疑問です。

この林分について指摘すれば、これまで森林が70年かけて林木や土壌に蓄えてきた炭素ストックが消失するので、そのことでＣＯ2としての排出時が出発点になります（下図、朱書、参照)。そうであれば、準備作業から始まる一連の伐採のＣＯ2排出行為からカウントされるべきです。　【つづく】



スギ造林(1ha)全過程の CO2収支と累計(1998、大熊)(一部改変)

札幌市民の森林「破壊しての変貌」ただす
ゼロカーボン政策の進め方が間違っている

札幌の自然は全国的な認知度や歴代街づくりを進めてきた首長においても固定された認識となり、市民もそうした中で生活を営んでいます。しかし、こうしたこれまでの街づくりが大きく変貌させようとしているのが、いまの札幌市の街づくり政策です。

それは札幌の魅力である豊かな自然を破壊しての変貌を遂げようとしていることです。札幌市の秋元市長は残念なことに「破壊しての変貌」の事実をいまだ気付いていません。

秋元市長が認識していないことで市民がこれまで築いてきた貴重な森林という財産が確実に消滅に向かっているのです。

札幌市の「破壊しての変貌」とは、市民の貴重な財産となる白旗山都市環境林のことです。市長は2050年までにカーボンニュートラル(温室効果ガスの排出を全体としてゼロにする)を目指すとして、「ゼロカーボン都市の実現に向けた札幌の挑戦」として宣言しています。

しかし現実は、白旗山都市環境林の皆伐･再造林をいまも進めており、この有様は森林破壊の実像となっています。

ここであらためて札幌市長が気付いていない点を指摘すると、ゼロカーボン政策を取り上げながら、実は、むしろ二酸化炭素(CO2)を放出し、地球温暖化を促進しているのです。この現実は看過できませんので、あえて申し上げたい「札幌市の政策は間違っている」そのことです。重ねてゼロカーボン政策の進め方が間違っています。

Q 2050年カーボンニュートラルに向けて林業はどうすればよいですか？

A 2050年カーボンニュートラルに向けて、森林吸収量の向上を図ることが重要。森林はCO2を吸収し、固定するとともに、木材として建築物などに利用することで炭素を長期間貯蔵可能。加えて、省エネ資材である木材や木質バイオマスのエネルギー利用等は、CO2排出削減にも寄与します。〈林野庁〉

※当会コメント➡果たして吸収・固定や木材貯蔵だけでいいのか。森林伐採の排出は？